

護身法 1

1. ミノムシ

私たちがミノムシとよんでいるものは、袋状の構造物にガの幼虫が入っているものです。カイコのように幼虫が分泌する糸で綴った袋の外側に枯葉や枝、コケ、ゴミをつけて隠蔽工作を行なっているのはミノガ科です。種によってつけるものに特徴があり、生息環境とも関わりがあります。その他、ヒロズコガ科のツヅミニノムシやあまり研究が進んでいないヒモミノムシとよばれるものもあります。

袋は非常に丈夫で、指の力ではまず引き裂けません。しかし、袋の両端は口が開いているので、安全なシェルターではありません。鳥は下側の開いている口からくちばしを入れて幼虫を食べることができます。上側の口は付着している枝などにしっかり付いています。隠れる必要のある捕食者がいるという

証明ですが、落葉樹の枝に付いていることも多く、冬には非常に目立つ存在となります。石などの構造物についている場合もかなり目立ちます。取り上げたミノガは幼虫越冬で、雌は成虫になっても幼虫の形態で翅がなく、囊から出ずにフェロモンで雄をよび交尾、産卵します。

打吹公園でミノムシといえば、オオミノガの幼虫の囊を指していることが多かったのですが、2017年ごろから見なくなりました。オオミノガは古い外来種で果樹園や庭木で勢力を広げていたのですが、幼虫に寄生する天敵のオオミノガヤドリバエが1900年代末日本に侵入し、オオミノガを衰退させたのです。最近さらにこのヤドリバエに寄生する高次のヤドリバチが発見され、生物のバランスが複雑な関係で成り立っていることがわかってきました。倉吉近辺でオオミノムシが何時復活してくるのでしょうか。寄主・宿主の関係が観察できる身近な生き物です。消長に気をつけて、記録しておいてください。

チャミノガの幼虫も小枝を隙間なく付ける特徴からわかりやすい囊を作ります。冬枯れ枝では見つけやすい種です。

クロツヤミノガの囊はほっそりと直線的で、落ち葉のかじり取ったものをきれいに貼り付けています。壁面や幹、フェンス等について越冬します。

シバミノガは陸上競技場のようなイネ科植物の生育している草はらが生息地で、壁面への付着が見られます。

ヒモミノムシは樹幹のコケや地衣類をつけた細い管状の筒の中から頭部を出してコケ等を食します。ツヅミニノムシはアリの巣に居候するマダラマルハヒロズコガの幼虫で、時々蟻道の破れから姿をみせます。アリを食べているといわれています。



オオミノガの囊

大きな枯葉や枝を付ける
生葉や皮を食べる

2016.5.17 打吹公園



オオミノガの幼虫
頭を出して移動する



チャミノガの囊
枝を付ける



クロツヤミノガの囊
モザイク状に貼付ける
スマートな形状
打吹山では個体数が多い



ヒモミノムシ
打吹公園のソメイヨシノ
の樹幹



シバミノガの囊
イネ科植物の稈
や葉を付ける



ツヅミニノムシ

鼓型の2枚の殻の縁を糸で
つづりあわせ、両端に口を
残している
樺の平 エノキの根元